

# 幕張キャンパスだより

第1巻第5号 発行日：2005/10/1  
放送大学千葉学習センター

## ハイライト:

特集：千葉学習センター「笠間陶芸の森」研修旅行



## 目次:

ロク口実習に参加して	2
お土産は、めおと茶碗	3
轆轤体験研修会	4
研修旅行に参加して	5
研修旅行	6
事務室からのお知らせ	7
編集後記	8

## 笠間陶芸の里 ロクロ実習に参加して

定刻より早く朝7時45分、学生17名と、事務局5名を乗せたバスは、快調に目的地へ向かった。参加者数は、事務局の想定した定員には及ばなかったようだが、参加出来た我々には、なぜ、参加者が、少ないのか・・・、もったいない話だと、残念に思った。2年前にも笠間への研修旅行があったので、同じ内容と思って自粛した学生もいると聞いている。2年前は絵付けの実習であったらしい。「ロクロ実習」と聞いて、不参加を残念がった数人を知っている。

ともかく、往路の高速道路も空いていて、順調な運行であった。今回の「ロクロ実習」を企画された、同行した坂井先生の、企画動機の話は、興味深かった。先生のお話の中から、自分で勝手に、参加の意味を作り上げた。(先生のお話を正確にはメモしていなかったので、ごめんなさい。)物づくりは頭で計算するものの、本当に大切なのは、実際に完成したイメージに、物を作り上げていくことである。ロクロ工程で作ったものは、最終完成のイメージとは違う。なぜなら、ロクロで作ってから、乾燥させ、さらに焼く工程があって後に、本完成するが、この工程間で、ロクロの現品は、相当に縮むのである。すなわち、ロクロでは、その縮具合を想定して、大き目の、厚目の現物を作るのである。今作っている、ロクロの現物を、焼き上がっ

「イメージの差異衝撃を体験することである。」



## 堀江周二

た後の縮んだ完成品としてのイメージで、作るのである。完成品のイメージ通りに、ロクロ現品を作るという、難しいことを体験するのが、今回の実習の一つの意味ととらえた。つまり、工程間のイメージの差異衝撃を体験することである。

ロクロ作業にも、当然熟練が必要である。マニュアルに添って、スタッフが、手を取って教えてくれる。また、歪みの補正や、肉厚の調整をも、助けてくれる。そうして1個目は、無難な作品が出来上がる。2個目は、マニュアル手順を忘れ、勝手に指を動かし、スタッフへのヘルプも告げず、結果、もはや修正の効かない、薄目の肉厚に仕上がリアウト。6個ぐらいいは、この粘土量で出来るとの、スタッフの声は聴いていたが、4個で終了してしまった。粘土は、残っていたが、イメージが、枯渇した。4個とも、どれも捨てがたい作品であったが、1個を選出した。

これが、やがて、乾燥、素焼きの工程を経て、1ヶ月後に、手元に届くとのことである。完成品とのイメージがいかに違っているかを、思い知らされるだろう。初体験で、4個ぐらいい作っただけでも、ロクロの面白さは、実感した。が、完成品のイメージという物づくりへのギャップ体験は、まだまだ何回か繰り返しての体験が必要だろう。次回、笠間ロクロ体験研修が企画されたならば、また、参加する必要がある。

ロクロ体験のあとで、茨城県陶芸美術館に入館した。入館後すぐに、雷と大雨で、集合時間まで、美術館から出られなかった。これが幸いしてか、館内を1時間30分も、じっくりと観覧できた。「人間国宝松井康成の全貌 ものいわぬかたちのひかり」が茨城県陶芸美術館開館5周年記念で開催されていた。松井康成の「練上(ねりあげ)」（色の異なる土を重ねたり練り合わせたりするなどして、文様のある生地土を作り成形する技法）[茨城県陶芸美術館パンフレットより]による作品などを、賞賛を持って鑑賞させてもらうことが出来た。

不確定・不明確な加熱の工程をへて、完成品をイメージすることの“妙”に、陶芸の至難な価値を垣間見ることが出来たと、今回の研修旅行を評価している。もちろん、学生相互、教職員との交流が図れただろうことは、想像できる。

## お土産は、めおと茶碗

今年4月から、生活と福祉課程3年次に編入を許可され、学んでいるものです。学習センターの掲示板で研修旅行の案内を見て参加させて戴きました。

研修旅行を振り返ってみますと、一口に言ってとても楽しく、有意義な研修であったと思います。まずは、往路の車中での自己紹介です。入学後、十年も在籍されていていらっしゃる方から、既に2つの専門課程を卒業され、新たな課題に取り組んでいらっしゃる方、さまざまなサークル、部活動の仲間であらしている方々の話を聞くにつけ、自宅学習が中心の私に取って、大学との関わり方を考える上で大変参考になることを、いろいろと聞かせて戴くことができました。

今回の研修には、轆轤（ろくろ）体験と、陶芸美術館の見学という2つのテーマがありました。しかし、更にレストランでの昼食会が隠れた3つ目の(?)テーマではなかったかと思えます。それは、美味しい食事とともに、十種類ほどの皿、小鉢等食器類の鑑賞です。隣同士一人一人違った器、それもどれをとっても一味あるもので、眺めていると興味が尽きませんでした。

話がそれましたが、午前中の轆轤体験では、窯業指導所の方から丁寧な実演

## 熊谷 敏

指導を戴き、2時間弱、めいめいに轆轤の前で土と取り組みました。技法は切りづくりです。教わったとおり慎重に指を動かしますと、意外と簡単にさまざまな形ができました。学生の皆さんのなかには、めおとご飯茶碗、湯呑み茶碗、ぐい飲みまで玄人はだしてたくさん作られた方や、ワインカップ、ビールカップなどをシリーズで作られた方等、思い思いに大変成果があったようです。1ヶ月半後には、完成品が自宅に送られてくることになっていて、後々まで楽しめる企画になっていました。

午後の美術館見学は、ちょうど前日から展示が始まった人間国宝、松井康成先生の特別展が中心でした。陶芸の世界は全く素人ですので、その道の名人の名前も存じ上げませんでしたが、館内の作品を一目見て、そのスケールの大きさ、緻密さにただただ驚くばかり、2時間弱の見学時間内にはとうていゆっくり鑑賞する事ができず、心残りのまま、帰路のバスの乗ることになってしまいました。

今回の研修が、皆さん大満足だったことは、研修終了時、先生と事務局の方の挨拶に対する、皆さん方の拍手の大きさが分かりました。次回の企画も楽しみに待ちたいと思います。

「2時間弱、めいめいに轆轤の前で土と取り組みました。技法は切りづくりです。教わったとおり慎重に指を動かしますと、意外と簡単にさまざまな形ができました。」



## 轆轤体験研修会

9月11日(日)、よく晴れた朝の出発でした。初めて会う人ばかりで不安でしたが、バスが出発してまもなく、事務の片桐さんの挨拶があり、今回の研修会を企画した坂井先生が紹介されました。坂井先生は、参加人数は少ないですが、この位の人数のほうが轆轤体験を十分できますので楽しみにしてくださいとおっしゃられ、笠間焼きについて説明されました。この研修会では、皆様が自分の手で物を作ることを体験してくださいと締めくくり、次の方の自己紹介へとマイクがうつりました。事務方の女性3人の自己紹介がありました。それから学生の方たちの紹介となりました。各人様々な経歴の持ち主でありました。全科履修を卒業し、新たに専門課程を勉強するという方もいました。驚きです。今年入学した私にも励みになりました。

自己紹介を聞きながら、車窓に流れる都会の街並み、川の対岸の景色、高速道路の巨大な造りと、目を見晴らす物ばかりです。あまり旅に慣れない者にとって物珍しい景色です。観光バスの高い座席から眺められる光景は、乗用車では味わえないものです。高速道路では、高い防音壁をつくらねばならないのかと、疑問に思います。町を外れ郊外へとバスが進み、稲刈りを済ませたところ、まだ稲刈りの済んでないところと、秋色の田園風景が車窓を走り抜けます。筑波山が眺められるはずでしたが、ガスがかかり残念でした。

そうこうしている間に、バスは笠間に着きました。笠間芸術の森公園では、山の中に近代的な建物が造られていました。しかし、周りがきれいに整備されていました、俗っぽい建物でなく、きれいな緑に囲まれ、調和が取れて落ち着いた雰囲気がありました。

土の魔術師たちと遊びの杜「匠工房笠間」で、いよいよ本日の目的の轆轤体験が始まりました。係りの方から前掛けとタオルを受け取り、指導員から轆轤の取り扱い方の説明がありました。初めて見る轆轤、久しぶりに胸がときめきました。指導員の手捌きに感心し、易しそうに見えました、これなら簡単かなと思い、早く轆轤に触りたい気持ちになりました。指導員の方の、道具を大切に扱う動作に感心しました。土を捏ねるにはみずっけ、轆轤の回転では手元は常に中心を保つこと、器を作るには力の加減をつかむこと、途中で捏ねるのに失敗したらその土は轆轤より切り離すこと(焼物は気泡が割れになるから)と云われました。

## 石川卯之助

このような指導のもとに、いよいよ轆轤に向かいました。轆轤の前に座り、まず足元のペダルを踏み、はじめて轆轤を回してみました。轆轤の上には粘土が、我々がすぐに作業ができるように形良く置かれていました。横に水の入ったバケツがあり、バケツから水を手ですくい粘土にかけ、掌でやさしく粘土を包むようにし、粘土に添えた親指に力を加えます。中心に穴をあけ、親指を小指側に移動させ底を作ります。親指と小指の付け根で粘土を挟み、ゆっくり上に手を移動させながらだまかに伸ばします。(作る器を想定する)、右手親指と中指で底の外側を絞ります。粘土の中心を右手中指でしっかり押さえ、右手中指と親指で粘土を挟み(加減がむずかしい)、ゆっくり上に手を移動します。器の形が現れました。もっと形良くと思い、薄く高くと手を移動したら、力の加減が崩れて歪になり、轆轤の回転を遅くしたら粘土が下がってしまい、形が崩れました。途方にくれていると、指導員の方が底の部分から取り崩して、轆轤から取り除き、グチャグチャにしてみました。

切り放した所から、新たに作り直します。手順を思い出しながら轆轤の回転を加減し、湯のみ茶碗が出来上がりました、糸で底から切り、轆轤を止め両手でやさしく器を持ち上げ作品台に移しました。さらにもうひとつと思い、2個目に挑戦しました。2個目は、より上手にとの思いで、慎重に轆轤を回転し完成させました。限られた時間で芸術作品が仕上げられたこと、笠間焼きを肌で感じる事ができ感謝いたします。

轆轤体験の余韻を残し、工房を後にしました。辺りを散歩してから、茨城県陶芸美術館内のレストランで食事です。出てきた料理についての説明がありました。おいしいうどん、天ぷらでした。美術館の創立5周年の催し物「人間国宝松井康成の全貌」を鑑賞し、笠間焼きのすばらしさに感動しました。

良く晴れた朝に出発した研修会も、美術館で作品鑑賞の間に雨が降り始め、どしゃぶりとなり雷が鳴り、笠間焼き轆轤体験研修会の幕を閉じました。帰りのバスでは、坂井先生が話をしましたが、人間観察と経済の話が陶工の後継ぎ話に組み込まれ、蘊蓄のあるお話でした。雨の高速運行も、慎重な運転のおかげで無事研修会が終わりました。企画された皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

「バケツから水を手ですくい粘土にかけ、掌でやさしく粘土を包むようにし、粘土に添えた親指に力を加えます。中心に穴をあけ、親指を小指側に移動させ底を作ります。親指と小指の付け根で粘土を挟み、ゆっくり上に手を移動させながらだまかに伸ばします。」

## 研修旅行に参加して

「関東の小京都」といわれるだけあって、笠間は緑の多い静かな美しい田園都市でした。出発して2時間余りで、「笠間芸術の森」公園へ着きました。

ロクロを用いた焼物工芸を体験したのは、初めてでした。笠間粘土の持つ渋さと温かさが手に伝わって来て感激をおぼえました。最初は緊張して思うように手足が動かさず心配しましたが、だんだん慣れて来ると楽しくなりました。時間のたつのを忘れる程夢中になり、もう少しロクロを廻していたい気分でした。

焼物は芸術です。指導して下さった方達に、几帳面にきちんと分かりやすくご指導いただきました。自分で使用した物はきれいに洗い元の所へ納めておくように、最後まで責任を持つように導いて下さいまし

## 飯塚玲子

た。私はお皿を作りましたが、焼いて色付けをして後日送って下さるとの事、とても楽しみです。

昼食は陶芸美術館内のレストランで、地元で取れた新鮮な野菜や湯葉のお刺身等、素朴な会席膳でした。とても美味しくご相伴にあずかり、幸せな気分でした。美術館では、松井康成の全貌を拝見し、すばらしい作品を見せていただきました。機械もたまには油をささないとなかなくなるように、人間も、たまには油をそそぎ、日々新たに生きて行きたいものだと思います。

坂井先生、片桐さん、3人の明るく卒直な職員の方達に心から感謝致します。こういう旅行をもっと増やして、沢山の学生に参加していただくと良いと思います。楽しい思い出本当に有難うございました。



「ロクロを用いた焼物工芸を体験したのは、初めてでした。笠間粘土の持つ渋さと温かさが手に伝わって来て感激をおぼえました。」

## 研修旅行

雲の流れをじっと見たことがありますか？風の音に耳を澄ましたことがありますか？笠間に流れる雲はどんな型をしている？吹く風はどんな音がするのだろうか？ということで、陶芸の街「笠間」に行きました。

バスの中で、ガイドさん以下全員の自己紹介が終わった後、経済学の坂井先生から陶芸の基礎知識「素焼き」の講義を受けました。素焼き？？素焼きなら昨日江戸川ではやての艇上で素焼きをしてきたので自信はある。「笠間焼き」は割と簡単だなと勝手に思い込み、酔い止め薬を飲み始めた。

車内で素焼きの瞑想をしているうちに、無事「芸術の森笠間」に着いた。「ろくろの体験教室」では、若い女性のインストラクターの実演と丁寧な説明（左手の親指で中心に穴を開ける 左手の親指を小指の方に寄せ、底を作る 左手親指と小指の付け根で粘土をはさみ、ゆっくり上に手を移動しながら大まかに伸ばす）を受け、左手が中心か、左手なら左党の僕にはやはり簡単だな、もしかしたら新進の陶芸家になれるかも・・・と思いながらエプロンをかけていざろくろに挑戦。

実際にやってみると、粘土に力を込めて

## 山本信行

も、すーっと持ち上げらず、グニャリで脇のプラスチックの再生用容器に捨てるばかり、こんなハズではと思いながら再挑戦したがやはり難しい。酔い止め薬を飲むのが早すぎたかそれとも飲みすぎ？

粘土を持つ両手がだんだん強くなってくる。悪戦苦闘したが、最後に先生の手を借りて、どんぶりか茶碗か区別が不明な作品を完成。不格好な作品だが、作者が小型短足なのでこんなものだろう。一ヵ月後に自宅に送ってくれる。絵付された作品が楽しみである。

笠間の風は、実用品から個性豊かな芸術作品を若い陶芸家が意欲的に生み出し、感動・哀切感・喜び・感傷をもたらしてくれた。

現地では、大学で拝顔するだけだった坂井先生から専門の「経済学」以外の学問についても薫陶を受け、大学の若い女性職員にも話し合いの時間をたくさん持てた。全員好感の持てる素敵な女性でした。美味しい地酒にも巡り逢い楽しい1日でした。

研修旅行を企画してくださった関係者の皆様、本当にありがとうございました。来年もよろしくお願い致します。

「実際にやってみると、粘土に力を込めても、すーっと持ち上げらず、グニャリで脇のプラスチックの再生用容器に捨てるばかり、こんなハズではと思いながら再挑戦したがやはり難しい。」



千葉学習センターでは、県内各地域との連携を図り、さまざまな交流活動に貢献できることが大事だと考えております。各機関や団体などからの依頼があれば先生方の協力を得て講演会を開催しております。

千葉市立高洲第一中学校で平成17年9月14日(水)に滝口俊子教授(発達と教育専攻)による「子育ての知恵」と題しての講演会が開催されました。

同中学校保護者会研修部主催によるもので、中学校の図書室での開催で当日の気温30度近い暑い中扇風機を何台も回しての開催でした。

滝口教授の一言一言の話しに思春期の子供を持つお母さんたちは大きく頷きながら熱心にメモをとっていました。

質疑では、お母さん方の悩みなど活発な意見交換が行われました。



平成17年9月17(土)に習志野市立袖ヶ浦公民館で浜口允子教授(人間の探求専攻)による「現代中国を考える」と題しての講演会が開催されました。

習志野市立7公民館共同事業によるもので、公民館集会室に一般市民約80名が熱心に聴講されました。

先生のお話のなかで中国は大きな変革には憲法が改正されているとの指摘には熱心にメモをとる方も多く見られました。

質疑では、中国の新幹線受注契約はどこの国が落札されるのかとのユニークな質問も飛び出し予定時間をオーバーしての活発な意見交換が行われました。



## 事務室からのお知らせ



放送大学千葉学習センター

*The University of the Air  
Chiba Study Center*

〒261-8586千葉市美浜区若葉2-11  
放送大学千葉学習センター

電話 043(298)4367

FAX 043(298)4386

Email: chiba@u-air.ac.jp

ホームページもご覧ください。  
<http://u-air.net/chiba/>

### 1. 今後の主な行事

平成17年10月9日(日)

- ・・・平成17年10月入学生の入学者の集い
- ・・・平成17年9月卒業生の卒業証書・学位記授与式

平成17年10月15日(土)から平成17年12月25日(日)

- ・・・2学期面接授業(土日型・毎週型)

2学期面接授業(土日型・毎週型)第2次追加登録

- ・空席科目の発表・・・平成17年10月18日(火)
- ・登録期間・・・平成17年10月21日(金)から25日(火)まで
- ・対象科目・・・平成17年11月1日(火)以降に空席のある科目
- ・対象者・・・全科履修生・選科履修生・科目履修生(10月入学生可)

平成17年12月15日(木)

- ・・・平成18年度第1学期学生募集受付開始 平成18年2月28日(火)まで  
平成17年12月29日(木)から平成18年1月3日(火)
- ・・・年末年始による閉所日

### 2. 学生証の発行について

10月入学の学生さん(新規・継続入学いずれも必要)で、まだ学生証の発行手続きが済んでいない方は、写真(6ヶ月以内撮影、縦26ミリ×横22ミリ)1枚と学生証用カードを持参し事務室窓口で早めに手続きを行ってください。

詳細は、学生生活の葉70ページを参照してください。

学生証がないと放送大学での学生サービスが受けられない場合もありますので早めをお願いします。

## 編集後記

- ・毎年恒例の千葉学習センター主催バス研修旅行を9月11日に行いました。今年は、茨城県の「笠間陶芸の森」でロク口実習を体験しました。参加した学生たちにその様子を描いていただき、特集としました。
- ・新しい学期が始まります。気持ちを充実させて、異なる分野に挑戦してください。また、単位を取れなかったかたも、気分を変えて再挑戦です。
- ・次回は第一学期卒業生の声を集めてみたいと考えています。卒業の感想など、400字程度の原稿を窓口まで、あるいはメールにてお寄せください。

